

【老人大学長賞】

「ぱぱとママのおしごと」

ゆあさしようがっこう

一ねん

うまたに

ひより

わたしのぱぱとママのおしごとは、おじいちゃんやおばあちゃんのおせわをすることです。

あさ、ひる、よる、おせわをひつようとして、いるひとのおてつだいをしています。わたしは、ときどきママのしごとばにいくことがあって、そのときにおばあちゃんたちとおはなしをします。おばあちゃんたちは、やさしくていつもかわいがってくれます。いっしょにぬりえをしたり、おりがみをおったり、いっぱいあそんでくれます。わたしのしらないおりがみをしっていて、やさしくおしえてくれます。ママが、

「おじいちゃん、おばあちゃんは、ずっとむかしからいきっていておしえてもらうこともとおい。」

と、いっていました。

ママのかいしゃにはあまりいけないので、じぶんのおばあちゃんにもいっぱいいろいろおしえてもらおうとおもいます。

「社協会長賞」

「ひいおばあちゃん」

湯浅小学校 二年 小西「颯

ぼくのひいおばあちゃんは、し水にすんでいます。ぼくがお正月やおぼん休みとかあそびに行くと、いつもよろこんでくれます。

ぼくがヘビのおもちやをほると、ひいおばあちゃんもわらってほりかえしてくれます。

いつもお姉ちゃんと、ひいおばあちゃんに絵を書いたり、お手紙を書いたりしてわたします。

「ありがとうございます。」

と言ってくれて、ベッドのよこのかべに毎回はってください。かべには、手紙やぼくとお姉ちゃん二人のしゃしんをいっぱいかざってくれています。ヘルパーさんがきたときは、ぼくらのしゃしんをよく見せていたと聞いて、うれしかったです。

ひいおばあちゃんは、お肉もいっぱいいたべるし、九十三さいなのに元気です。そんなおばあちゃんが、しせつに入ることになって、あまり会うこともすくなくなりました。

この前、びょういんにはこばれたと聞いて、かなしくなって、ぼくはなきました。その日はだいじょうぶだったけど、なん日かしておばあちゃんは、ほしになりました。ぼくは、めちやくちゃんないて、お姉ちゃんも、おかあさんも、おとうさんも、みんなないてかなしかったです。ひいおばあちゃんとおわかれした日、さいごの手紙を書いて、ひいおばあちゃんのふくのところにさみましました。ひいおばあちゃんのおもいでいっぱいあるし、おぼんるときも手をあわせに行きました。

ほしになった今も、ぼくらのこと見てるから、べんきようも、サッカーも、ともだちとのあそびも、ぜんぶがひいおばあちゃん、だいすきだよ。

「ユアサエ克蘭会長賞」
「ぼくには何ができるかな」

湯浅小学校 三年 山田 楷

ぼくは、小さいころ、お母さんの読み聞かせが大好きでした。お母さんは、ほいく園や小学校へも読み聞かせに行っています。ぼくが理由を聞くと、

「みんながよろこんでくれると、元気をもらえて楽しいんですよ。」

と、言っていました。その時は、意味がよくわかりませんでした。

小学校一年生の春、おばあちゃんがいるろう人ホームのお花見によばれました。ぼくは、お気に入りの本をおばあちゃんといっしょに読もうと持って行きました。すると、しせつの人に、

「みんなにも読んでくれるかな。」

と、たのまれました。ドキドキしましたが、おじいちゃんおばあちゃんは、え顔で聞いてくれました。読みおわると、大きなはく手で、アンコールまでありました。

それがきっかけで、今もう人ホームで読み聞かせをつづけています。今では、「もっとよろこんでもらいたいな。」と、いろんな出し物もするようになりました。

ある日、にんじゃショーをしました。一人のおばあちゃんに刀をわたすと、すごい速さで刀を向けてきました。ぼくは、ゆだんしていたので、びっくりしました。車いすのおばあちゃんが、立ち上がってしんけんしようぶを始めたので、みんな大盛り上がりでした。

ぼくは、おじいちゃんおばあちゃんを楽しませてあげている、と思っています。でも、元気やえ顔をもらっているのは、ぼくの方でした。

お母さんが昔、「みんながよろこんでくれると、元気をもらえてうれしい。」と、言っていた意味が、今ならよくわかります。これから、「ぼくには何ができるかな。」と、考えながら読み聞かせや出し物をしていきます。

「湯浅町長賞」
「安心」

湯浅小学校 四年 川口 朋子

今回、わたしの書く人は、近所の七十才くらいで畑
仕事をしているおじちゃんです。

学校の行き帰りでは、

「いってらっしゃい、気をつけてね。」

や、

「おかえりがんばってきたね。」

と言ってくれます。

そんなおじちゃんを見て、わたしは安心します。

わたしのおじいちゃんとおばあちゃんは、はなれた
ところに住んでいるから、あまり話さないけれど、お
じちゃんは、毎日声をかけてくれるから、わたしの
じいちゃんみたいでうれしいです。

わたしは、今まで老人福祉作文を書いたことがあり
ませんでした。だけど、ピアノの帰り道にお母さんと
帰っていると、おじちゃんがすごく明るく話しかけて
くれて、うれしかったです。

それで、

「老人福祉作文は、おじちゃんのことにしようよ。」
とお母さんと、話しながら帰りました。

わたしは、老人福祉作文で、おじちゃんにかんしゃ
の気持ちをつたえます。

いつも明るく話してくれてありがとうございます。
たまに野菜をくれるのが、とてもうれしいです。サニ
ーレタスは、お肉をつつんで食べました。みずみずし
くておいしかったです。

ずっと元気です。

【湯浅町議会議長賞】
「夏休みの旅行」

湯浅小学校 五年 飯田 翠海

私はこのあいだ、おじいちゃんとおばあちゃんと、お母さんとお父さんと妹と私で、白浜に旅行に行きました。

おじいちゃんとおばあちゃんと会うのはひさしぶりで前日から楽しみにしていました。おじいちゃんとおばあちゃんは、いつもやさしくて頼りになるし、元気でいつも楽しそうな私の大好きな人たちです。

実は毎年八月に白浜に旅行に連れて行ってくれます。八月は私とおじいちゃんのお誕生日です。おじいちゃんは、私が生まれる前から、孫がでるのをとても楽しみにしていたそうです。私が生まれた日には、お父さんより早くかけつけてくれたと聞いています。

私が初めて旅行に行ったのは、一才の時でした。おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お父さんのお姉ちゃんその旦那さんと一緒に行ききました。アドベンチャーワールドに行き、小さい私の後ろを、大人六人がぞろぞろついていったのでお母さんは少し恥ずかしかったそうです。私はこの話を聞いて、

「私って愛されているな。」

と嬉しいような恥ずかしいような気持ちになりました。その時の写真には、私をだっこしてとても嬉しそうなおじいちゃんが写っています。この時私とおじいちゃんのたん生日をお祝いしたのでそれからほとんど毎年、白浜でお祝いしてくれています。

私はこの誕生日プレゼントがとても大好きです。なぜなら、物をもらったりするよりもおじいちゃん、おばあちゃんと二日間ずっと遊べるほうが嬉しいからです。私はプールが大好きなのでいつもホテルのプールに入るのがですが、おじいちゃんはずっと一緒に入ってくれます。お父さんはすぐに出ます。

おじいちゃんには私もたん生日プレゼントを渡します。絵をかいったり、手紙を書いたり、今年はコースターを作りました。コースターを作るときには、パーツをきれいに並べたり、色合いをそろえたりしました。形はハートにして、妹と一緒に作りました。おじいちゃんにわたすと、

「きれいでよくできているね。」

と言ってくれました。とても嬉しい気持ちになりました。

私はこの旅行がずっと続いたらいいなと思います。お母さんは「反抗期がきたらどうなるかなあ。」

などと言うけど、私はお母さんやお父さんには反抗するかもしれないけど、おじいちゃんとおばあちゃんとの旅行の日はこれからもずっと大切にしたいと思います。

【湯浅町教育長賞】

「わたしにできること」

湯浅小学校 六年 須井 結萌花

私のおばあちゃんは、今年の七月に骨折をしました。でも、骨折してからは、いろいろなことができなくなってしまうました。歩くことも大変で、家の中で移動する時も気を付けたりしないといけないかもしれません。今まで普通になんかできていたことができなくなるのは、すごく悲しいと思います。

私は、おばあちゃんが大変そうにしている姿を見ると、「何か手伝ってあげたい」と思うようになりました。でも、最初は何をしたらいいかよく分かりませんでした。そこで、おばあちゃんの様子をよく見ることにしました。すると、物を取ることや歩くことなど、私が思っていた以上に大変なことが分かりました。

ある日、学校から帰って来た時、ポストにチラシが入っていました。おばあちゃんは、歩くこともしんどいので私がついて、おばあちゃんに渡そうと思います。おばあちゃんにチラシを渡すと、笑顔で

「ありがとう。」
と言ってくれました。その時私はとても嬉しい気持ちになりました。チラシをとってくるといふ小さなことでも、おばあちゃんの役に立てたことが嬉しかったです。

私は、「老人福祉」という言葉を聞いたとき、最初はお年寄りのお世話をする仕事だと思っていました。でもおばあちゃんを通じて老人福祉は仕事だけでなく、困っている人を助けることも大切だと分かりました。

私はまだ小学六年生なので、大したことはできません。でも必要なものを取ったり、歩く時の支えになったり、話し相手になったりすることならできます。これから、おばあちゃんが困っていることに気づいたら、

「なにか手伝おうか？」
と自分から声をかけてあげたいです。

そして、おばあちゃんが少しでも安心して毎日過ごしてほしいです。おばあちゃんが骨折してできないことが増えると、本人も不安になったり悲しくなったりしていると思います。だからこそ、周りの人が優しく声をかけたり、少しでも手伝ったりすることが大切だと思います。これから、おばあちゃんを大切にして、私にできることを少しでも増やしたいです。そしておばあちゃんだけでなく、おじいちゃんや困っているお年寄りがいたら、相手の気持ちを考えて、優しく声をかけられる人になりたいです。小さな親切でも誰かを助けられることをこれから忘れずにいたいです。

【社協会長賞】

「スマホより大切なもの」

湯浅中学校 一年 田中 陽美莉

みなさんは祖父母のことが好きですか。私は大好きです。しかし、最近、私は祖父母と話す時間がだんだん減ってきていると思っています。そう思う理由は、スマホが原因だと思います。

私は、祖父母の家に行く時でもスマホを持って行きます。家でスマホをたくさん見ているのに、祖父母の家に行ってもソファーに寝ころがりスマホを見てしまします。

よく母に、

「スマホばかり見てないで話しなさいよ。」

と言われます。しかし、十五分ほどしたらひまになってしまい、また手にはスマホがあり、見てしまっている自分がいます。

ある日母が、

「久しぶりにばあちゃん家に行く？」

と言いました。私は「最近会っていないから楽しみだ。」と思っています。すると母が、

「敬老の日にはばあちゃん家に行けないから、今日はお話したり、遊んだりしてあげてね。」

と言いました。私はふと思ったことがあります。それは「いままでの自分はスマホばかりであまり話していなかった。」ということです。

その日は祖父母の家でカードゲームをして遊びました。すると祖父母の顔には笑顔の花が咲いたような表情をしていました。

楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。私は帰りの車の中で思ったことがあります。それは、「スマホをずっと見ているよりも、なかなか会えない祖父母と遊んだり話をする方がよっぽど楽しい。」ということです。また、祖父母は私がスマホばかりだとうれしくないし、楽しくないと思っています。毎日会えない二人だからこそ、会えた時にはおもしろかったことを話したり、習い事のバスケットの話をたくさんしてあげたいと思っています。

このような時代になってくると、人と会話をするという時間が減ってくると思います。母や父、友達などは毎日会って話しているけれど、私は祖父母といっしょに暮していませんので、なかなか会話ができません。なので、久しぶりに会えた時には、楽しかった事やうれしかった事をたくさん話せるいいきかいだと私は思っています。

みなさんも、「人と会話をする」ということを大切にしたいと思っています。

「お母さん、疲れているな。」

これは数年前の私が毎日のように思っていたことだ。

私の母は数年前まで介護士として働いていた。毎日疲れた様子で帰宅し、夜勤の日は朝に帰ってきて、そのまま倒れるように眠る毎日だった。勤務時間が不規則だったため、一日以上母と会えないこともあった。母が大好きだった私は寂しく感じていたが、その仕事にやりがいを持ち、一生懸命働く母を誇らしく思っていた。しかし当時の私は介護の仕事をよく知らず、「お年寄りの手助けをするだけなのに、どうしてこんなに疲れているのだろう」「そんなに大変なのに、なぜ続けるのだろう」と疑問に思っていた。

ある日、母が働く老人ホームに連れて行ってもらった。私は老人ホームに静かで少し暗いイメージを持っていたが、実際は、幸せそうなお年寄りがたくさんいて、施設全体が笑顔であふれていた。私を見るとお菓子をくれたり、一緒に遊んでくれたりする方もいた。そして利用者の方一人一人に明るく優しく接する母の姿を見て、家では見たこともない新しい母に出会えた気がした。それでも家に帰ると母はやはり疲れていた。私は、母は私の見えないところで毎日精いっぱい頑張っているのだと感じた。

数年後、母は介護士を辞めた。そして一年前、老人ホームでいつも優しく接してくれた大好きなおばあちゃんが亡くなったことを知った。もっと会いに行けばよかったという後悔は今でも残っている。当時はまだ幼く、「亡くなる」を十分理解できなかった私を思い母は何も言わずにいてくれたのだと今では思う。行くたびに明るく迎えてくれた笑顔、優しく名前を呼んでくれた声、あたたかい手のぬくもりを私は今でも忘れていない。

少し成長した私は、母に介護についてたくさん質問した。「あのおじいちゃんはどうしていなかったの。」「骨折したからだよ。おじいちゃんやおばあちゃんにはけがをしやすいからね。」「どうして夜勤があるの。夜は寝るだけじゃないの。」「夜でもベッドから落ちてしまう人がいたり、トイレの介助をしたり、見守りが必要だったりするからだよ。」「その話を聞いて、介護は想像以上に大変な仕事なのだと知った。しかし同時に、その仕事は利用者の方々にとっても感謝され、働く人もやりがいを感じられる、あたたかい仕事なのだと気付いた。

母の姿を見てきた私は、介護は体力だけでなく、人を思いやる心が何より大切な仕事なのだと感じている。介護士にならなくても、いつか祖父母や両親を支える日が来るかもしれない。そんな大変になる時間でも、あたたかく見守って、あたたかく接して、母のような優しい笑顔であたたかく支えてあげたいと思う。

「社協会長賞」

「ぼくたちのおじいさん」

湯浅中学校 三年 太田 季

亜

ぼくには、中学校に入学してから、今もほぼ毎日バスで学校までみんなのことを送迎してくれるおじいさんがいます。

そのおじいさんは、八十歳を過ぎているのですが、とても元気でパワフルな方です。

いつも、朝早くからぼくたちのことを学校までバスで送ってくれます。毎朝全員がバスに乗っているかを確認してくれ、誰かが乗っていないかたりすると、心配していつもぼくたちに「〇〇君は休みか」と聞いてくれます。とても人思いで、優しいおじいさんです。

おじいさんには、東北楽天ゴールデンイーグルスで活躍しているプロ野球選手の孫がいます。おじいさんは、孫が大好きでバスの中に孫のグッズを置くほどです。孫がホームランを打ったり、活躍したりしたときは報告してくれます。本当に孫が好きだという気持ちが伝わってきます。

昼など休み時間になると、道に落ちているゴミを拾ってくれたり、通行でじゃまになる木や草をとってくれたりして、みんなが過ごしやすいようにと、町をきれいにしてくれています。

ぼくは、それを見て町をきれいにするためにがんばってくれていて、尊敬の気持ちでいっぱいです。

ぼくは、そんなおじいさんが大好きです。おじいさんがごくたまにバスの運転手ではなかった日は、とても心配な気持ちになります。

中学校卒業まで、残り少ないけどいっぱいおじいさんと話したりして、日々の感謝を伝えたいです。

卒業したとしても、おじいさんが運転するバスに乗りたいたいと思います。そしてまた、野球の話をしてもらいたいのです。

感謝の気持ちを忘れずに、今日も「ありがとうございます。」をかかさずにおじいさんのバスに乗ります。